

新羅郷歌の解讀小考

劉 昌 宣

新羅の郷歌を始めて解讀したのは、小倉進平博士である。博士は昭和四年に「郷歌及び吏讀の研究」なる名著を著して世に送つた。博士の郷歌解讀に於ける功績は永久不滅であらう。この點に於て、私は、郷歌解讀の開拓者であり、且つ功勞者である博士に對して、萬斛の敬意を表するものである。

小倉博士の郷歌解讀が發表されて以來、此方面に於ける論議は、殆んど皆無であつたが昨秋始めて、梁柱東氏は青丘學叢誌上に於て、博士の解讀の部分的矯正を試みられた。氏の「願往生歌」の解釋及び解讀の如き、斯界の一大功勞でなければならぬものであらう。

私は、此小考に於て、餘り僭越ではあるが小倉博士の

全解讀及び梁氏部分的解讀に於て、誤讀誤解と思はれる所を、ごく斷片的に論じようとする。尙ほ、印刷の關係上、朝鮮語をローマ字で綴らなければならぬことを遺憾とする。

二

稱讀如來歌——

(1) 今日部伊冬衣

博士は、部を「分つ」の意ありとして、*nan-toi* から *nal* に、冬衣を「入る」、「至る」の *deu-in* に讀んで *nal nal deu-in* (今日に至り) と解讀した。これの誤讀なることは嘗て梁氏の指摘した通りである。(青丘學叢誌第十九號) さて梁氏はこれを如何に讀んだかといふに、氏は部伊を *na-in* と讀んで、此句を *Onal na-in deu-in* (今日

(207)

大衆共の) と解した。然れども、部伊を *na-in* と讀むことは出来ない。郷歌、懺悔業障歌には「今日部頓部叱懺悔」の句があるが、果して、氏は此の部も *na-in* と讀むであらうか。是は前者と全く同じ綴方で、前者を *na-in* と讀めば、これも *na-in* と讀まなければならないものである。併し、後者は其歌の全體から見て、この部を *na-in* と解釋することは出来ない。

この今日部伊冬衣は今日部、伊冬衣の上下二句に分つべきもので、部は別に意義なく、*Onal* の尾に附く Δ に當るものである。 Δ は語尾に附く *sa apu* と相通するものである。そして伊は *in* (彼) と訓讀すべきものである。要するに本句は *Onal na-in na-in* (今日彼等の) と讀むが正しい。

天子 *sa na-anal* 天之哀(龍歌一ノ八)

I sa-rum ap Pdeu-di Riis ka 豈是人意(龍歌三ノ

一五)

Da-sa-san *in* *ap* 半單 *wka* 雙 *wkwa* 親 *in* (鬘髮

經) 伊 *in* (訓蒙字會、下、雜語)

共 *in* (新增類合、上、人論)

新羅郷歌の解讀小考(劉昌宣)

其等徒 *na-deu-in* (吏文綴例、三葉)

(2) 毛等盡良白平隱乃今

博士は毛等を *mo-deu-in* (集め) を寫したものと見て、此句を *mo-deu-in da-na sa-p-on-ne* と解讀したが、意味不通である。この毛等は *mo-deu-in* (不得) を寫したもので、*mo-deu-in* (不) に解すべきものである。つまり本句は *mo-deu-in da-na sa-p-on-nei* (申し盡きかねる) と讀むべきであつて、譯歌の縦、未談、第一毛德に當るものである。

三

廣修供養歌——

(1) 火條執音馬

博士は條を「箸」と解して、火條を「火の箸」に用ゐられたものであるとしたが、これはそのまゝ *pu-tka-in* と讀むのが正しい。

(2) 佛前灯乙直體良焉多衣

直體を博士は *ko-lyu-in* (直す) の義に解したが、これは大いに間違つて居られる。佛前の灯を直すと云つては意味が通じない。これは *ko-lyeol* (*lyeol* (照す)) と讀むのが

正しい。直は値と相通する字であつて、これを今はcapsと訓むが、上代に於ては*hid*と訓じて居た。尙ほ現存語の*hid*(借金)・*hid-sa-da*(値段が高し)等は其遺痕である。そして、此句は「佛前灯 *eu bi-chet-nan-dai*」と解すべきで、譯歌の至誠明照佛前灯に當るものである。尙ほ佛前灯を博士は *Bi-tyu ap deung-jan* と訓讀したが、これは語調から見て「佛前灯 *eu*」と音讀する方が良いであらう。

Ku-nu-mi bi-chu-ye-neul 赤氣照營(龍歌六ノ四二)
No-pun nal-li when-han kil-ci bi-chu-yet-dota

高棟照通衢(杜諺二、遺詠)

(3) 手焉法界毛叱色只爲稱

色只を博士は巴只の誤文であらうとしたが、これは、色の訓 *his* から *s* を取つて、上の毛叱、即ち *nis* の *s* に當てたものであらうと思ふ。尙ほ博士は禮敬諸佛歌に於ける「法界毛叱所只至去良」の毛叱を「果し」「末」の義と解し、同歌の最終句「此良夫作沙毛叱等耶」の毛叱は「信する」と解して居られるが、同じ詞を斯の如く或は「果し」に、或は「信する」に解讀することは出来な

いてあらう。禮敬諸佛歌にある毛叱も悉く *nis* (及ぶ、達する) に解すべきものである。

四

懺悔業障歌——

(1) 菩提向焉道之迷波。

博士は迷波を *meui woe* と讀み「憎む」「厭ふ」の義であるとしたが、上代に於ける「憎む」「厭ふ」を意味する詞は *a-chu-n* であつて、決して *meui-woe* ではないか。この迷波は *il-pit(i-hn)* と讀んで、「失ふ」「迷ふ」の義に解するのが正しい。

Kal-pa-reul i-woe ha-no-so-ni 迷所向(杜諺一七、九)
 迷、*Kil-i-huul-mi* (新增類合下、動止)

(2) 淨戒叱主留ト以支乃遣只。

ト以支乃遣只を博士は *ti-ni-ni-to* (戴き) と讀んで、惡習に陥れる三業を、茲に淨戒の主を戴き、今日ぞ精進の懺悔をなすと解したが、これは本句全體の意味を誤解したのであるまいか。ト以支乃遣只は *ti-ni-ni-to* と讀むべきである。ト以は *ti-ni* (支ふ、負ふ)、乃は音

na であるが仍に通じて *ni* とも讀まれる。つまり、これは *ti-ni-ni-to* (戴き得やうか) であつて、稍々打消で、反問的である。譯歌の盡諸空界不能容に當るものである。

(博士が譯歌の此句を法界餘音玉只云々に當ると云つたのは誤である)

そして本句は前句と合せて「惡習に陥れし三業は豈に淨戒の主を戴き得やうか」と解すべきであつて、「今日ぞ云々」は下句と聯絡あるものである。

(3) 今日部頓部叱懺悔

郷歌には二三ヶ所に頓部があり、唯、頓とある所もある。博士はこの頓部に就いて「精進」なる語を當て居られるが、これは *jo-e* (頓首する、禮拜する) と讀むのが正しいであらう。頓の現代訓は *jo-eul* であるが、その原形は *jo-e* であつた。部の字はこの「*e*」を現はすものである。後にはこの「*e*」が除かれて唯 *jo-e* と云ふようになったのである。そしてこの頓部若くは頓は、悉く *jo-a* (その名詞形は *jo-am*) と讀むべきである。

I-ba-die nu-riral jos sap-eu-ni 當宴敬禮(龍歌九、

九四)

頓 *Ni-na-jo-al don* (字會下、雜語)

頓首 *Mari-jos-da* (譯語類解上、禮度)

五

隨喜功德歌——

(1) 緣起叱理良尋只見根

博士は理良を *da-sa-ryu* (究め) と解して、「緣起 *rai da-sa-ryu*」と讀んで居られるが、稍々意味の曖昧な譯である。この理は *da-sa-ryu* と讀むべきものでなく、*ple-ul* と讀むべきである。そして本句は「緣起人 *pleul-cul cha-jit-pok-on*」と讀むべきである。

Hanal pdeu-di si-ni 實維天心(龍歌一ノ四)

pleu-deul 得 *ha-ya-dan* 得志行所爲(杜諺二)

(2) 得賜伊馬落人米無叱甞

博士はこれを *U-deu-sim-ye di-sa-ran-i* (救ひ給ふに落伍する人は) と解釋したが、これは、得賜伊馬落までを一聯として解くべきである。得は今、*deul* と讀まれるが、私はこれを *ot* と讀んで賜伊を合せて *ot-sya* と解くこの得の意味は普通何々を得るといふ義でなく、自分の

嫉妬は *aini* と読み、至刀は *ito* と読みのが正しい。
博士は至刀を *ito* と解して居られるが、これは至の訓
ito に、刀の音 *to* を以て *ito* に當てたものである。要す
るに本句は *sun-cus ma-mi e-ro-oka* と讀むのが妥
當である。

請佛住世歌

(1) 皆佛體必千化緣盡動。賜隱乃皆は^ニコト^ニニ、動は^ニミ^ニと解する。

一併（譯語類解下、賣買補）

De-re-ma'i a-ni muh-sai 風亦不抗 (龍歌 171)

mai-cui no fan heung-cui mu-u-na-ni 動高興(杜諺)

ni-mui-yū ha-ni-non chung-c 於動用中 (蒙山法話)

$$\begin{array}{c} + \\ - \\ \cup \end{array}$$

(2) 手乙寶非鳴良爾

博士は實非を難解の語であるとして、これを pu-peu-
vin(採んで)に當て、 son-at-pu-peu-yn ni-hui と解し

(210)

kis-ki au-ra ka-di a-ni ha-na-ni 不喜去(杜諺八)

卽日 c kish-kou-shin 卽日憚之 (龍歌五ノ二七)

(十) 嫉○妬○叱○心○音○至○万○來○去○

(3) 不冬喜好戸僂乎理叱過
喜好戸はニガハニニではなく、ニシハニと讀むべきである。

菩提^{〇〇}妬^〇葉^〇青^〇烏^〇乙^〇反^〇隱^〇（請轉法輪歌）
 ket kong-bu-ral o-di-ni-ra 便論工夫（同上）

法 *de-pi na yaa ol-ta-rin* 如法始得 (蒙山法語一四)

四)

(211)

たが、手を揉み鳴らすことは、一體どんなことであらうか。尙ほ、*pu-pou* の古語で、*pi-dai* (譯語類解上)、*pya-
pi* (四聲通解下) 等である。この寶、非は *pas-pi* (念いで)
と讀むのが正しい。*pas-pi* を上代では *poi-was-pi* と云つ
て居たが、それは *poi-us-ta* (催す) なる語と同意義であ
らう。寶は音 *po* で *poi-as-pi* の *pi* を、非は *poi-as-pi* の *pi*
に當てたものである。そして本句は *soo-al pas-pi ni-ryū*
(手を急ぎ鳴らして) と解すべきである。

Hel-kal u-du-muŋ poi-ws-pi ha-nos-da 得泥壘

(社諺八)

Ka-jans poi-was-pa du-ra 敦迫(同上二四ノ二三)

快些 (譯語類解下、二字類補)

(3) 曉留朝于萬夜未向屋賜尸朋知良闇尸也

類る難解の一句である。この長らしい一句を私は、博士とは別に曉留朝子萬までを一句にし、夜未向屋賜戸朋知良調戸也を他一句として解することにする。さうしなければ意味が通じないからである。曉留を博士は *un-chen* (曉) と解したが、曉の古語は *un-pai* であつて、*un-chen* ではなかつた。若しい、これを曉の義に讀むなら

新羅鄉歌の讀小考(劉昌宣)

常隨佛學歌

(1) 皆往焉世呂

往焉を「ヨロヨロ」と讀んで意味が分らない。往は「ヨロヨロ」と讀まなければならない。

ko-ja-n ni-kūn hai-s deul-ku-rai fes-do-da 花叢去年

叢(杜諺三)

kui-nan ni-kin dal pu-tu mi-ku-ra (同上)

(2) 身塵。只。碎良口塵。伊。去米

博士は塵。只を ip-si(じび)と讀んで、これを nom ip-si pu-seu-ri-dyū と解したが、勿論、間違つて居られる。

塵は音 mi で、身塵を合せて mo-mi と讀むべきである。心音、人音、秋察等と同じ書方であらう。塵伊は deu-keul-i yu sa-yu na deu teul-i と讀むべきである。

要するに本句は nom-i pu-seu-ryū deu-teul-ro kamū (身は碎けて塵となり)と解する。

(3) 佛道向隱心下。

心下を博士は na-am-i (心は)と讀んだが、これは na-am-ha (心あり)と讀まなければならぬ。この下は現存語 S mi-ti-ya (美也)・sa-ran-a (人々)の ya 若くは a の如く呼び掛けに用ゐられた詞である。

殊にこの終の二句に就いては其全體的意義が、博士の解釋と私は所見を異にするので、こゝに是を述べて、諸彦の教正を乞ふことにする。即ち、博士は、これを「心

に佛道を修めなば他道に迷ひ行くこと無かるべし」と意譯なされたが、惟ふに、此二句は城上人が、上の隨佛を願つた歌に對しての返歌であつて、其隨佛願を激勵する意味を持つて居るのではなからうか。そして其全體的意味は「佛道を修める心よ、他道に迷ひ行くことなかるらん」と解すべきものであらうと思ふ。

八

恒順衆生歌——

(1) 迷火隱乙根中沙音賜焉逸良。

やはり難解の一句である。博士は本句を迷火乙 sun-eul pui-hi-ra sa om-sya-nan i-ya (迷火に蔽はるゝ根にぞ移り給ひ)と解して、例の難誼な意味不通の讀方をなされたが、これは、先づ迷火隱乙根中までを一聯として解しなければならぬ。隱乙は sun-eul (蔽はるゝ)ではなく、二字を合せて eul(を)と讀むべきもので、こゝでは昔便上、i(を)と解するのが正しい。そして迷火隱乙根中は「迷火 i e pui-hi-ra (迷火を根に)と解讀する。次の沙音賜焉逸良は、先づ、沙音の沙は sa と音讀し、音

(213)

はの長音を現はすものであるから、沙音二字を合せて sa と讀む。賜焉は syan であるから逸の音、i を、是に加へれば賜焉逸は syal-i となる。良は ryū と讀む。つまり沙音賜焉逸良は saa syal ryū 即ち sa-ro sya-ryū (消さうとして)と解する。初めから i までの意義は「覺樹王は迷火を根から消さうとして」の義である。

Na-ken-nai si-reu-meu sa-ro-mi is-do-da 銷客愁

(杜諺七ノ一)

Seu-sung sa-ro-mal sam-ka-si-ko 慎焚巫(杜諺一〇

ノ二五)

Mi-rei hyūn peu-i sa-ra-ka-nos-da 蠟炬殘(同上、

六ノ一五)

(2) 法界居得丘物叱

博士は居得を ka-duk-han (満てる)と讀み、梁柱東氏は此句の丘物叱の ku-meu、即ち衆生たることを指摘しながらも、これに就いては沈黙して居られること、實に不思議である。この居得を「満てる」と讀んで果して意味が通するのであるか(實際、満てると讀むことも無

理であるが)これは sa-ro (住み得る)と解するのが正しい。居は訓 se で、住むの意であり、得は訓 do であるから、居得二字を合せて sa-ro と讀まれる。つまり本句は「法界 sa-ro ku-meu ku-meu」(法界に住むべき衆生)の義である。

(3) 佛體爲尸如敬叱好叱等耶

爲尸如は han dai (行つた通り)と讀まねばならん。

敬は ko-ma と讀むべきもので、敬は、謹むの義である。そして敬叱好叱等耶は ko-mahol deu-ra (敬ひたし)と讀む。譯歌の覺路宜從行原成に當るものである。

(4) 佛體頓叱喜賜以留也

博士は、これを kis-ou-sya i-ya (喜び給ふべし)と讀んだが、これは kis-ku-sya-ni-to (喜び給ふのである)と解すべきものである。

この終の二句の意義を博士は「衆生の心安からば佛は其精進を喜び給ふべし」と解釋したが、これは博士が其意味をあべこべにしたのではあるまいか。これは、「若し衆生が安ければ、佛は彼等の禮拜を喜んでゐるからであることが推量せられる」との意味である。譯歌にも恒順

遍教群品悅可知諸佛喜非轉とある。

九

得烏谷慕郎歌——

(1) 去隱音皆理米

皆理米を博士は *da da-sa-rimyei* (過ぎ果て) と解したが、勿論誤解である。又梁氏は是を *ken-rimyei* (慕ひて) と解した。(「青丘學叢」併し、皆を *ken* と讀むては無理があり、又「慕ふ」といふ意味を寫すには此歌第七句に「慕理」とあつて、吏讀の用例は悉く「慕理」或は「慕呂」になつてゐる。況や、同歌に於てをや。氏が是を *ken-i* と讀んだのには賛成し難い。私はこの皆理を *ken-i* (代る) と讀む。皆の現存音は *ken* であるが、これを *ken* と讀むには何の無理がないであらう。代る、替る等に使はれる *ken-i* といふ語は、上代の文獻に所々に見られる。そして、此句は *ken-nun pon ka-rim-nai* (行く春は代りて) と解する。

Nara ilhum kara senei 韋改呿號(龍歌八ノ八五)

Sai nim kum i ka ra si ni 更新主(杜諺二ノ二三)

戸は *do-ra-hye* (廻して) と解する。そして七史の七を博士は叱の略體であらうと説いたが、私はこの七史は良史と同じく、*si* であらうと思ふ。七史伊衣は *si-i* (姿に) と解するを可とする。要するに本句は *nun-cul do-ra-hyei si-i* (目を廻して姿に) と讀む。

(4) 逢烏支惡知作平下是

惡知は惡支、惡只、等と共に多く使はれたもので、博士はこれを *si* と讀んで、動詞の中止形又は副詞形であると解し、梁氏は惡只、惡支を *si-i* に、惡を *si* (内の意) に解した。併し只、知、支、等が必ず *si* に使用されるか、必ず *si* に使用されたことのない以上はこれ等の字が惡と合して、其字の下に附く時にのみ、これを *si* 或は *si* と讀んで、*si-i* とか、*si-i* とかに解しなければならぬことはあるまい。此點に於て兩氏の解讀は共に間違つて居られる。殊に梁氏は *si* を内の義に解して「一念 *si*」「法界 *si*」「*na-ra*」等の新しい術語を創作したが(「青丘學叢」)古今を通じてそんな詞はない。郷歌に使はれた惡の用例は煩を患ひ之を擧げないが、惡と惡支を區別して見るべきものでないことは、安民歌に於て *ni-ra* を、或は國惡に或

(2) 毛冬居叱沙哭屋戸以憂音

毛冬居叱を、博士は *no-dem kis-i* (總てのも) と讀んだが、毛冬が總ての意味に用ゐられた例はない。この毛冬は稱讚如來歌の毛等と同じく *mod* (不) と解すべきものである。(前文) 居は *sa-i* (住む)、*ni-i* 居る(等の義で、居叱沙は *sa-ra-sya* (住みて) と解する。憂音は *si-reum* と讀むべきである。

Naras iral si-reum ha-ya 憂呿(杜諺二四)

Pung ei si-reum 無時病去憂(同上、八)

要するに、本句は *mod sa-ra-sya u-i si-reum* (居られないので哭き憂ひ) と解する。

(3) 目煙廻於戸七史伊衣

目煙廻於戸七を、博士は「口煙遙けき」と讀んだが、本句を解釋するに當つて、目煙廻於戸と七史伊衣を分けて讀むべきものなることは一見分るであらう。目煙を博士が幽明と意譯したのは何に據つたのであるか知れないが、目煙と云ふ術語は佛敎字典にもない詞である。この目煙は目を *nun* と訓み、煙の音 *yun* は *nun* のに當てたものである。憂音、秋察、母史等と同じ綴方である。廻於

は國惡支に綴つたのを見ても分るであらう。この惡は惡知、惡支、惡之、等を論ぜず、悉く *si* と讀むべきである。(母音調和のため、*si* となる時もある) それは惡の音 *si* が *ra* のみを取用するのである。獨り惡のみでなく、屋も同様ではないか。要するに本句の惡知は *si* と讀んで、逢烏支惡知は *mas-nao-i* (逢へる) と解する。

(5) 阿冬音乃叱好支賜烏隱

博士は乃叱を *na-ra* (を) と讀んで、阿冬音の助詞とし、好支を *tyo-ha* (好み) と解して居られるが、郷歌の用例に於て、好支を「好む」の意味に用ゐた例はない。この乃叱は *na-i* と讀み、好支は *ho* と音讀して、乃叱好支は *nalho* (廻回する、彷徨する) と解する。本句を *u-deui nalho syan* (何處に廻回する) と讀んで、次句の良史の修飾語と思ふ。

Bab Mū keura meul-tu-ohai nalho-ya nyu 退食

遲回(杜諺六ノ一四)

Nalho-ya syu macha nai ki-ri 遲回竟授歎(同上、四ノ一〇)

Nalhoi-ya kuru 侍臣緩歩(同上、六ノ六)

(6)蓬々叱巷中

博士は、これをpsuk jil(蓬々ゆる)と解したが、誤解である。蓬はpsukやななく、da-po-jilである。

Da po ja ro ip hai nating ka ro ni 蓬爲戸(杜謬三)

Da-pos syū ri ci pa ri-yū syu-ra (同上、八、五六)

蓬 da-pok-psuk pong (牟會上、草卉、新增類合上、草卉)

そして、本句は「da-pos 巷 ai」(蓬の巷に)と解する。以上の解讀を纏めて記せば次の如くである。

Ka nam pom ka ri-mai, mod saras-ya ul ū si-reum;

U-deui nal ho-syan jis 年數 ni-lwoe-di ū nyū-jci,

Nim eul do-ra-hyū jis-ai, mas na-o-ū ji-o-ri.

Keu ri ma am nyū-ol kil eum, da-pos 巷 ai jal
pam i-si ri.

(大意) 行く春は替るのに、郎は住んでゐないので、
哭き憂ふ、何處へ廻回する姿は、年數が終るまで落
行いて歸らぬのか、眼を廻して郎に逢へる時は何時
になるであらう、郎を戀ひ慕ふ心の行く道は、蓬の

陋屋にまでも夜もありやしなう。

10

安民歌——

(1)民爲狂戸恨阿孩古爲賜戸知

狂戸恨を博士は ni chil-eum(狂へる)と解したが、誤解である。狂を上代にはnūと訓みた。現存語のu-ris u-ris han-da(迷ふ)、u-ri-wkang(狂者)等は其痕跡であらう。狂戸恨はu-rinと讀まれるが、それはu-rin(幼き)の意と解しても良いであらう、けれども上代に於けるu-rinなる語は「愚なる」を表示する詞であつた。そして、この狂戸恨は其下の阿孩を形容する語であつて、u-rin a hai 即ち愚兒と解釋しなければならぬ。

U rui nol-ai peul rŭ 狂歌倚聖朝(杜謬、三ノ述詠
下)

U rin a dal-ai meu dŭn hi nŭ ki no ni 從愚子(杜謬、
一四ノ二四)

(2)君如臣多支民隱如

博士は、此句を nin-keum i-da E i-da 民 i-da(君た

(217)

り臣たり民たり)と解讀したが、尙ほ語法未熟の嫌がある。如はra(らしく)と讀むべきものであるから、これは「君た臣だ民だ」(君らしく、臣らしく、民らしく)と解すべきもので、下句の爲内戸等隱、即aha-na dan(するならだ)に應ずるものである。

11

讀耆婆郎歌——

(1)咽鳴爾處米

難解句の一つである。博士は、これをyŭi chinai(押し開き)と解したが、どうしても満足出来ない解釋である。惟ふに、此句のメーポイントは、どうしても處でなければならぬ。處の上は其形容詞に當るべき性質のものにしか見えない。處は、郷歌に於てkodの意味に記された所が數三あり、米は大概天爾於波のmin(若くは音便上min)に當るを常とする。そして、咽は訓mであり、鳴爾は三國史記地理志に「戊城縣本高句麗百爾忽」とある如く、m即ちmiであるから、私は咽鳴爾三字をmi-miと讀んでmi-o-toni(仰ぎ見る)と假に解したい。つまり、本句をmi-

lon ko-tai(仰ぎ見る所へ)と解する。

(2)雪是毛冬乃乎戸花判也

毛冬并乎戸を、博士はmol na-to(知らぬ)と讀んで、此句をnun-i-mol-na-toと解したが、毛冬は既に論じた如く、mol(不)と解する。乃乎戸はna-o-b(優る、及ばぬ)と音讀すべきものである。そして、本句は nun-i-mol na-to 花判 i-yo(雪をも及ばぬ花判である)と解される。尙ほこの花判は花郎を意味したものであらうと論じた小倉博士の説に別に異議はないが、この花判は花刺の誤文ではないかと思はれる。花刺はko-ji(花)と讀まれるから此の後句に於て郎を花に譬へて、雪をも及ばぬ花であると歌つたものではなからうか。

12

盲兒得眼歌——

(1)一等下叱放

この一等を、博士は han-min-to と讀み、梁氏は、前問氏の説(鷄林類)に従ひ、鷄林類事によつて han-min と讀

んだ、博士が *han mi* と解したのは、意味の妥當しない解方であり、又梁氏が鷄林類事の「日河屯」の記事に據つて *han mi* と解したのにも同意し難い。類事は、高麗時代の方言を記した貴重なる文献たるには違ひないが、例の支那人の變な文字の使ひ方、又は發音の相違のために、折角ではあるが鹽言の解釋に、それ程役立つものとは云へない。そればかりでなく、其内には數多の誤字、誤寫や、聞き違ひらしきものがある。曰はゞ金石相雜の状態である。随つて、類事に「日河屯」があるからと云つて、一を *han-tan* と讀んでゐるのは、前田氏の速斷である。思ふに、この河屯は一と云ふ數の根本的呼方ではなく、たゞ、例へば、現存語の *han kai, han-nat* の如き意味を寫したものであるらしい。杜詩諺解には「一若くは箇々を *nas-na-chi, nas-na-i* とあり、龍飛御天歌には「一を *han-na-tai* とあるのを思はば、上代には *han-na-tai* が *han-na-tai, han-na-tan, han-na-ti, han-na-to, han-na-tan* と活用され、たに違ひないから、類事の河屯は *han-na-tan* を記したものに違ひなからう。随つてこの郷歌にある、一等の等も *han-na-tan, han-na-tai* 等を表はしたものであらうと、私は

(218)

(219)

義に當つたが、この叱も本句の次吟と同じく *chyu* と讀むべきである。之叱逸鳥隱は *chyu mi on* (恨むべき) と解釋するのが正しいであらう。此の *chyu* なる詞は、今は廢語になつてゐるが、上代には屢々使はれた語であるから、又「是と絶々似たる詞」 *ni was chyū* (怨憤)、*A-chyū-ryū* (憎む、厭ふ) 等がある。次に此等の用例を擧ぐる。

Jo-ko nas na-an-ai i-ki eura chetra 恨其違本心
(杜諺六ノ一四)

Kana koi wa kachiral cheuki ni-ki-ko 音書恨
鳥隱 (同上十六)

Ku-ti-yū cheuki nyū-ki-ji ani ha-no-ni 襄年不敢恨
(同上、ヤヘ一十一)

Ai-wa-chyū hada 怨憤 (杜諺三)

Ai-wa-chyū ho-mu 憤懷復何有 (同上、五ノ二七)

奸邪 *ral A-chyū-ryū* 嫉邪 (同上、二四)

一四

月明師驚齋歌——

新羅戀歌の解讀小考(劉昌宜)

斷する。そして、本句の一等も *han na* と讀むのが最も正しいと思ふ。要するにこの「等下叱放」は *han-na-tan no-tan* (一つを放し) と解する。

一三

月明師驚齋歌——

(1) 此矣有阿米次吟伊遣。

博士は次吟伊遣を *mi-ko* (懼をなし) と讀んで、第一句と共に「生死 *kan ichi sanat ju-ko*」(生死の路は此處にありと懼をなし) と解した。そして其意譯には「生死の岐路に立ちて懼をなし」とあつて、死者自身が生死の岐路に立つて、恐れて物も云へなかつたと解してゐるが、これは誤解らしく、意味に圓滑を缺いてゐる。この次吟の次は、*chyū* (恨む) と解すべきである。次吟伊遣は *chyū-ko* (恨めしい) と讀むのが正しい。即ち「生死の路は此處にあるからそれが恨めしい」と、月明師がその亡妹の死を恨む歌である。尙ほこれと相似てゐる詞に、信忠怨歌の最終句、世理都之叱逸鳥隱第也がある。この叱逸鳥隱を、博士は *mi-jū-on* (唐ぐる) と解して「厭す」の

(1) 月置八切爾數於將來波衣。

博士は八切爾を *pa-sei* (既に) と解したが、これは *pa-i* (速く) と讀むべきである。八の現代音は *mi* であるが、李朝初期の文獻には *pa* とあり、切は *mi* で、*pa-i* の一に當つたものであらう。波衣を博士は *pa-i* (により) と解したが、これは *pa-hoi* (岩、硯) であらう。 *pa-hoi* といへば、今は殆んど岩の意味であるが、上代には大抵硯を表はすに用ゐられた。本句は「*dal du pa-i sui-pa hoi*」(月も早く休まうとする硯に) と解する。

(2) 此也反物北所音叱慧叱只有叱故。

難解の一句である。先づ、博士は此也反物北までを切つて「*I-i pas-kas-deu* (これを外にして)」と讀み、其下を *Pan pi-jit-ak-i-ko* (夜の筈のあるべきか) と解した。併し、本句は其構造から見ても、此也反物北所音叱までを、先づ一聯とし、其以下を他一聯としなければならぬと思ふ。此也反は *mi* と讀まれて、これは *mi, from, i-mi* 等と同じく、「斯の如き」の意味で、其下の物北の修飾語である。物北は物叱の誤文たるに違なく、郷歌中に物叱なる句は随分多い。物叱は *mi* (物) である。そして、所音叱は

paal(所を)である。要するに此也支物叱所音叱は ireum kus paal(斯の如きものを)と解する。

次の慧叱^ヒ只有叱^ヒ故の慧叱^ヒ只を、博士は等の義であらうとしたが、私はこの慧の字は等の義でなく、此歌の第七句にある慧星の約であらうと思ふ。叱^ヒ只を三^ミと讀んだのは全く牽強の極である。慧星を今は三^ミと云ふが、上代には何んと云つたかはつきりしないが、兎に角、某^ミと云はれたことには相違なからう。故に、結局慧叱^ヒ只は sal pūi(慧星が)と解しなければならぬ。下の有叱^ヒ故は iskoと讀まれるから、この句は salp ūi isko(慧星であらうか)と讀んで、慧星ではないといふ打消の語である。要するに、本句全體は ireum kus cul sal-pūi i-ris-ko(斯の如きものを慧星とは云へないであらう)と讀む。

尙ほ此の慧星歌は此の外にも、博士とは解釋を異にする所が二三あるが、煩を惡んで之を省き、私の全解讀を擧げることとする。

Nei ro 東 Nyūik meul ka 乾達婆 no-on jas-al pa ra,
Yei-nais kun-du was-dako 烽火 sal an karai ka ja
三花 cui naru po-syal daud-ko daktu pal-i siul

物叱^ヒは郷歌中、到る處にあつて、kus(物)を意味してゐるが、それは大部分、現存語の「物」の意義とは稍々意味を異にして、大概は「物生」を意味してゐる。本句の物叱も「物生」即ち、生氣あるものゝ意味であることは勿論である。そして、此句は「物生^ミ jas-i」(生々たる栢が)の義であらうと思ふ。

(2) 秋察不冬爾^ニ支^ミ墮^ミ米^ミ

爾^ニ屋^ミ支^ミ墮^ミ米^ミは Li-on di-mi、即ち、この不冬^ニを合せて、an-deul niro ū dimi(至らずして枯れることが)と讀むべきである。

(3) 仰^ミ頓^ミ隱^ミ面^ミ矣^ミ

仰^ミ頓^ミを、博士が「うけがひ」と譯したのは、名譯の一つであらう。併し、朝鮮語には、これに當つるべき良い詞がない、博士は、これを U-woe Jo-eulと解したが、そんな詞はないから、私は暫く、之を Sken-dük-in(うけがひたる、肯いた)と解して置く。

(4) 月羅理影^ミ支^ミ古理因淵^ミ之叱^ミ

影^ミ支^ミは ken-reu-mei(影)と讀み、淵^ミ之叱^ミは Mos-aと解しなければならぬ。

pa ho-i-ai Kil cul pseul pūl-eul pa ra-ko Sal pūi i-ra
sar-pon Sar-um i is-da.

(後句) Dal pūi ka-deu-ra ireum kus cul Sar-pūi i-ris-ko.

(大意) 昔から東方の邊なる、乾達婆の遊ぶ城を望み見て、倭軍が攻込んだと思ひ、烽火を揚げる邊境に至り、三花の徒の山に遊ぼうとすることを聞いて、月も早速く共に休まうとする峴に、道を掃く星を望んで、慧星だと申す人が居る。後句、月が浮いて行くのみ、斯の如きはどうして慧星と云ひませうか。

一五

信忠怨歌——

(1) 物叱^ヒ好^ヒ支^ヒ栢^ヒ史^ヒ

物叱^ヒ好^ヒ支^ヒを、博士は Kus chyū(取り除かれて)と讀んで、この句を kus chyū jasiと解したが、物叱^ヒ好^ヒ支^ヒの栢史の形容詞たることは一見に分るであらうに、これを「取り除かれて、栢が」と解したのは、寧ろ不^ニ足^ニ議^ニである。

(5) 行^ミ戸^ミ浪^ミ阿^ミ叱^ミ沙^ミ矣^ミ以^ミ支^ミ如^ミ支^ミ

博士は、これを Nyū-tan skeum s mo-rai-ci mū-meul-i(行きて、隅なる沙に止まり)と解して、行^ミ戸^ミ浪^ミを、上句淵^ミ之叱^ミに續けて讀んだが、勿論誤讀である。これは、行^ミ戸^ミ浪^ミ阿^ミ叱^ミを一^ニ緒^ニに^ニ讀^ニむ^ニべきものである。行は訓讀して Nyū-i 戸は一を表はしてゐる。この行^ミ戸^ミは、下の浪^ミ阿^ミを修飾する。浪^ミ阿^ミは meus-kuil である。そして、行^ミ戸^ミ浪^ミ阿^ミ叱^ミは Nyū nan meus-kuil al(行く浪々)と讀むのが正しい。沙^ミ矣^ミ以^ミ支^ミ如^ミ支^ミは mol-ai-ro koi-ū(沙に止め)と解すべきである。

次に全解讀を纏めば、斯の如くである。

生々 hon jasi Karai an-deul niro ū dim i,
Nū ū deui nyū-jei-ra i sin skeu dük-in nas ko-ti-syan
deul-ro,
Dal ken-reu mei ko-in mos ai, Nyū-neun meus-kuil
mol-ai-ro koi ū,

Jis en-isa pa-ra-na Nu-ri-do chyū-rūn Jai yo.

(大意) 「生々たる栢の、秋に至らずして落むることが、どうしてあるだらうか」と、うけがひたる顔を改

め給ふので、月影の映つてゐる湖の水を沙で止め、君が姿をば望むけれど、あゝ世はかくも恨めしいかな。

一六

願往生歌

この願往生歌に就いては、梁氏の詳しい研究がある。
 (『青丘學叢』一九號、三〇—四四頁)氏によつて、小倉博士の誤解した部分は大概訂正されたが、氏の解釋にも又同意し難い所がある。殊に、此歌の全體的意義に就いて、氏は「廣徳の妻が平素自分の信仰を月に寄せて、歌つたもので、由來歌に於て自分の懷ふ所を或は月、或は雁、或は花等に寄せて歌ふのは、朝鮮の歌謡に慣用される形式である。この一篇の如き朝鮮の人には直感的に合點のつく或物がある」(六三)と云つて、此歌は廣徳の妻が、月に向つて、「月よ、西方迄往つて無量壽佛に告げてくれ、茲に一人の女ありて兩手を合せて願往生／＼慕ひ居ると告げてくれ」(四)と云ふのであると解したが、これは餘り直感的に合點がついたものらしく、梁氏が小倉博士の曖昧な、而も間違つた解釋を矯正して、此歌を廣徳の妻の信仰の

歌であることを明かにしたことは、實に敬意を表する次第であるが、彼女がこれを月に寄せて歌つたと云ふ解釋は誤解である。

案するに、此歌が月に寄せて歌つたものなるか、否かを決めるには、此歌の内容から、これを決めなければならぬであらう。そして、この與否を決すべき要點は三つである。

- (1) 第一句の月下伊底亦は「月よ、今」と解すべきか、「月の下なる」と解すべきか。
- (2) 第四句、及び第八句の白遣賜立は「申し給へ」と解すべきか、「申し度し」と讀むべきか。
- (3) 第四句の惱叱古音郷言云は報言であるか、傳言であるか。

(1) 第一句、月下伊底亦を、梁氏が「月よ、今」と讀んだのは誤である。氏は下を言と讀んで呼掛の語に解いたが、郷歌に於ける、下の用例を見るに

イ、吾衣身不喻仁人音有叱下呂
 ロ、佛影不冬廣爲賜下里
 ハ、然叱皆好尸下里

(223)

(222)

ニ、吾衣身伊波人有叱下呂
 ホ、逢烏支惡知作乎下是
 ヘ、宿戸夜音有叱下是
 ト、二胎隱吾下於叱古
 チ、二胎誰支下焉古
 リ、本矣吾下是如馬於焉
 ス、月下伊底亦
 ル、佛道向隱心下
 ヲ、白雲音逐干浮去隱安支下

こゝに於て、我々は下の用例の四型を見る。

甲型、イ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、
 乙型、ト、チ、リ、ス、
 丙型、ル、
 丁型、ヲ、

煩を患ひ、詳しい説明を避けるが、以上の用例を見れば、月下伊底亦が、「月下、伊底亦」か、「月下伊、底亦」かが明かになるであらう。

(2) 賜立の用例は、此歌の外、一ヶ所しかない。而も此歌の解釋には重なる役割をなすものである。即ち懺悔原

禪歌の第八句、「十方佛體闕遣賜立」であつて、「十方の佛は知ろし召し給へ」といふ祈願の詞である。この賜立には願望の義があるのみで、命令の義はない。第四句及び第八句の白遣賜立は、月に向つて「申し給へ」といふ命令ではなく、無量壽佛に、斯く斯くと「申し上げたい」といふ、彼女自身の祈願の告白である。

(3) 惱叱古音郷言也 多可支白遣賜立

梁氏は惱叱古音を *ni-te-kom* (告げて) と讀んで、惱叱を「告ぐ」、「申す」、「謂ふ」に、古音を動詞、副詞等に添へられる、*nom* に當てたが、この惱叱古音四字は、決して動詞ではなく、動詞形容詞である。其下に、「郷言云報言也」とある註を、小倉博士も、梁氏も共に注意しなかつたのは、かへつて不思議である。梁氏は、小倉博士の *news* (悔) も讀んだのを難じながら、「この報言が傳言以外の如何なる義も含まないにも拘はらず」(三三)と、云つてゐるが、併し、報言は報言であつて、決して傳言ではあるまい。この點に於て、博士の「悔」と解したのは勿論違つてゐるが、梁氏の「告げて」と讀んだのも、間違つて居られる。梁氏こそ、此歌は廣徳の

妻が月に寄せて歌つたものと誤解したから、此報告も傳言と曲解したのではなからうか。

要するに、此歌は廣徳の妻が、月の下なる西方まで往つて、無量壽佛の前に、往生の願ふことを申し上げたいと云ふ、願望の歌である。

一七

永方遇賊歌——

(1) 日沙也内乎吞尼

博士は、日沙也内乎を *mal ha ki nol-naon* (言はんすべも知らぬ) と解したが、この日は *karon* (云はる) と讀み、沙也内乎は *sa-naon* (險しき) と解しなければならぬ。そして上句の兵物叱を博士は「兵物を」と讀んで、賊の武器を指せる語であらうとしたが、これは郷歌に多く出て来る兵物叱の誤寫であらう。

(2) 唯只伊吾音之叱恨隱善陵隱

吾音之叱恨隱を、博士が *hirun-jan heun* (尊ぶべき) と解したのは、餘り附會である。これは吾音之叱を *nu a* (吾の) 恨隱を *han* (多き) と讀んで、*na-ra han* 善行 *an* (吾の)

(223)

つたらうと思はれる。そして、但社は詩諺解、譯語類解等に○主(た)と讀まれし例があり、非乎隱は *pu-ion* (留守なる) と音讀し、破は *ni* と訓讀する。主は *min-jei* の義であらう。鷄林類事には主曰主とある。次弗は、*ji-pu* (家を) と讀んで、始めから *ni* を *ji-pu* と讀んで、*O-jik pu-ion hu-lon ji-pu* 唯、留守なる破れし家を) と解する。次の无史内於都は *ip-se-do* (無くても) と讀み、還是訓、*do-ra-ol* と讀んで、還於戸朗也を *do-ra-ora* (歸つて来る) と解する。

紙面の關係のために、詳しい考證や説明の出來ぬのを遺憾とするが、以上の解讀を纏めば次の如くである。

Jei ma an ni ji-nis eul dan-anhai nu-ol-jei ji-na-ko,
I-jei dan sup ei kato so-da.

O-jik pu-ion hu-reun jeijib ip-si ü do do-la-ora.
I-jik sa di-na-ol kar-ton sa-naon dan-i-yo.

Aa o-jik na-rai ban san eun an han 尙宅 do-i-ni-da
(大意) 我が身の迫つて來た後の谷は、日、尙ほ高き晝間に過ぎて來て、今は谷間の藪中に行き掛つてゐる。唯、留守なる破れし我が家もないけど斯の如く歸つて

新羅郷歌の解讀小考(劉昌宣)

多き善業は)と解すべきものである。

(3) 安支尙宅都乎隱以多

安支尙宅を *na-nop-jeuk* (何處にか高く) と讀んだのも、誤りである。安支は讃耆婆郎歌の安支下、恒順衆生歌の安爲飛等と共に、「*An han*」(安かなる) と讀んで、尙宅の修飾語と解すべきである。都乎隱は *do-ion* (なる) である。そして、此句は「*An han 尙宅 do-i-ni-da*」(安かなる尙宅となる) と解する。

本歌の四字の闕字に就いては、輕卒に筆を加へることは實に恐れ多いことではあるが、私は此歌の全體的意義や、脱字前後の構造を見て、最も適當であると思はれる文字を入れて、解釋して見た。全く假説である。

(4) 日遠鳥逸□□過出知道

第二句の日遠鳥逸の下なる二字の脱落は、本句の意義、及び其構造(信忠怨歌の終句參照)を見て、隱第を入れる。尙ほ本句の毛達只は *ma-da* (及ぶ) と解する。

(5) 但非乎隱破□主次弗□史内於都還於戸朗也
破の下字は、破の助詞として、戸若くは隱があつたのであり、史の上字は、郷歌に多くある无史の无の字であ

來る。この衆生界を過すことこそ云はゞ險しき谷の如きことではないか。あゝ、唯、我が積みし善行のみ安らかなる尙宅となる。

一八

以上は小倉進平博士の「郷歌及び吏讀の研究」と、恩師梁柱東氏の部分的解讀とを相手にして、兩氏の解讀の我が試讀と意見を異にする所を、ごく断片的に綴つたものである。本より淺學非才、未だ學窓に籍を置いてゐる筆者は、尙ほこの方面に於ける研究の日淺のため、實に意外の誤謬を犯したかも知れぬ。

尙ほ、筆者は未だ博士には、直接教はれたことはないが、私は博士の開拓した道を進み、博士の研究によつて啓蒙されたものである。この無秩序なる拙論に於ける粗忽と唐突とを、博士は先輩の立場から、諒解して下さることを乞ふ。尾に臨み、謹んで兩氏の嚴正、且つ懇篤なる教示を鶴首する。(完)